

# 汲古一紙

— 講演より —  
『書の現代性』(九)

中村素堂

何が現代かというところで、われわれがこれから作るのに参考にしようとか誰かの雛型を求めていけば、古人のものをなぞるのと同じです。そうではなく、これを硬質の筆で書いてみようとか、ああいうものをもう一遍硬質で書いてみようとか、根本的な質の概念を變貌してみる。同時にその呼吸感の深さとか、呼吸感の流れというものをに入れてみよう。ひとつ沈潜させて静かな線でもって行ってみよう、もう少し迫力のある荒い線でもって行ってみようというようにもって行けば、そこからいくらでも現代は無限に生まれれると思う。これからの「現代性」というものは——。これこそ「現代性」の根本的な二つの要素ではないか。ひとつは形の上のもの。ひとつは呼吸感という見えないもの。この二つがあれば、これからの新しい書というものは、いくらでも作れるのじゃないか。誰かがやっているものを真似しようとなさらないほうが新鮮だと思ふ。

今の呼吸感の問題などでも、人間には体質的にあるのですから、鼻息の荒い人もあります。そうかと思うと呼吸の弱い人もあるわけです。人間で触れてみたってそうでしょう？本来静かな人、本来荒くできてくる人があるでしょう。そんなふうで、一概にどうともいえません。けれども、それよりもいちばんいい呼吸感というのは何かということ。呼吸感をこしらえようと思っていて、その呼吸感を忘れていた時がいちばんいい呼吸感です。自分がハッと打ち込んで行つて、そこから静かに行こうと書きます。何遍も書いてるうちに、最初に予期したことを全部忘れて書く。最初に気負った筆を打ち込んで、パッと出たところから渴筆のまま書いたあとで、かすれたまま持つて行こうとする。しかも終わりにくるのは静かなほうがいいということが解つてくる。そうすると、書いてるうちに、だんだんそれを忘れてしまう。何となく手が覚え体が悟つてそう書いてしまう。そんなふうにして書いたものがいちばんいい。だから、自覚して書いている呼吸感というのは本当の呼吸感ではない。私は、

いるんなものを苦勞して書くんだけれども、展覽会に持ち込む時には、中村さんは一枚しか書かなかつたんじゃないかといわれるのが有り難いです。そういうふうにいってもらつたら大変助かるんです。随分苦勞してお書きになったんでしょう？なんていわれたらゼロです。つまり、すごい呼吸で書いたんでしょう？なんていわれたのは、三昧に入つてない証拠なんです。本当にいい呼吸感というのは、最初に計画したもので練り始めても、いつの間にか初めに計画した呼吸感を忘れて、体も手も、自然に三昧の中に没入してしまう。そしてひとりでもう書いているのを見ると、いいなあーと思う。近ごろ、古人の書で名筆だといわれるものを見てみると、それなんだね。鍛錬している間に、しまいは体にしみちやつて、呼吸感を忘れて呼吸感の調節ができていんだと思うのです。

書の持つ精神性というものが呼吸感というような解釈の仕方でもいいのですが、精神性は全部呼吸感だといわれると嘘です。精神性というのは、もうちょっと高い次元のところじゃないでしょうか。しまいは造形でさえも、何もかもひつくるめたものが精神性であつて、呼吸感が精神性そのものだなんていわれるとこれまた困るのですが、そうじゃない、呼吸感も精神性のものであるんですが、ただ精神性のものかんりの表し方を呼吸感もっているのは間違いない。けれども、みなさんが先にものを認識する時の大前提に造形があるのじゃないですか？その造形の中の深さを何が作っているかとなつたら、呼吸感が作っているのじゃないでしょうか。この二つの中に、今申し上げたようなものが錯綜してうまく出て来させれば、いつでもそれが新鮮なんじゃないでしょうか？それが新鮮だとみんなが見たものが、生命のある現代性ではないでしょうか。それが大多数に広がってきたものが、その時代性になるわけです。だから、時代性に合ったものがみなうまいというわけにはいけません。

(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔祭墨〕昭和五十二年十月